

論文

# 尚美大1年生の英語受容と そのニーズについての考察

大味 潤

## Shobi Freshman Perceptions and Needs in English

OOMI, Jun

### Abstract

The researcher conducted a survey in all six English-mandatory classes for freshmen at Shobi University in December, 2010. The purpose of the survey was mainly to investigate the students' self-evaluation in English, the importance of English to them, and their English needs in the future. He also examined any tendency among the Yutori-generation toward a lack of interest in learning.

The results show that despite the students feelings inadequate in English, they recognize the need of the language in their future careers. They demonstrate a strong desire to communicate with non-Japanese people in English when they acquire fluency in the language. This survey also shows that common classroom activities, such as presentation in English, speeches in English, and preparation for English proficiency tests (i.e. TOEIC), do not attract the attention of students enough in this generation. This research also reveals the possibility of change not only in students' language abilities, but also in their attitude toward English and English learning motivation even in the short term.

### 邦文抄録

「読み」「書く」「聞く」「話す」の4技能のうち、学生が何を求めているかを明らかにする為、尚美大学1年生の必修授業の履修者全6クラスで2010年度12月に共同アンケート調査を実施した。アンケートでは自己評価による英語力、学生にとっての英語の重要性、さらに将来的なニーズについて尋ねた。また同時に学習力の低下が指摘されるゆとり世代特有の傾向の有無を調査した。その結果、英語に対するコンプレックスが強い一方、英語に対するニーズは大多数の学生は認識しており、英語力があれば積極的に外国人と英語でのコミュニケーションを取りたい希望も強いことが分かった。これは英語によるプレゼンテーションやスピーチ、またTOEICに代表される各種英語試験も、学生の興味を十分に引いていないことを示唆している。また同時に、短期間の必修授業であっても、その授業内容により学生の英語力や、英語学習への取り組みそのもの、さらには英語に対する態度にも影響を与える可能性があることが分かった。

キーワード

英語教育 (Teaching English as a Second Language)

学生モチベーション (Students' Motivation)

学生ニーズ (Students' Needs)

カリキュラムデザイン (Curriculum Design)

## 1. 序論

大学はその制度上、カリキュラムやシラバス作成の際、学生の実態やニーズを知る前に次年度の方向を修正し決定しているが、それが果たして学生の実情と合致していたのかの検証は行っていないことが多い。これは大学側が前年の年度末、すなわち新入生の入試前に授業内容を全て決定しているという事実と、また入学後は既定のシラバスに従って粛々と授業を行うという構造故に他ならず、止むを得ない事情もある。

しかし、本来教育は学習者側が何を求めているのかについて行うべきであり、そのニーズを把握せずに教育は出来ない、というパウロ・フレイレ (1979)の教育哲学に基づいて省みれば、本末転倒であると言わざるを得ない。ちなみにこれは日本語教育等、その言語を使って生活する必然性のある第2言語教育については現在必須要件になっているが、外国語教育依然たる学校の英語教育についてはほとんど実施されていないのが、国内いずれの大学の現状である。

筆者は尚美学園大学で1年生を担当するようになって5年が経つが、川越キャンパスの総合政策学部で担当しているクラスはコース (前期英語Ⅰ、後期英語Ⅱ) 全6クラス中、3クラスのみである。その自ら担当する3クラスについての動向は、逐一アンケート調査等で把握していた (大味、2009) のであるが、コース全体で縦断的に調査したことはこれまで一度もなかった。

一方でゆとり世代と言われる学生が2010年度に入学し、その学力や学習態度については多方面から言及されることが多い反面、その現状はまだあまり知られていない。また当大学では、入学時に行われるプレイメントテストによって学力別に6クラスに編成されるのだが、その妥当性もこれまで具体的に検証出来ないままで来ている。

その為、今回はもう1名のコース担当者である講師と共に、コース全体6クラスを対象として、1) 英語力についての学生の自己評価、2) 学生の英語に対するニーズ、3) ゆとり教育世代特有の傾向の有無、4) 各授業内容の学生への影響 (アンケート実施が既に年度末の12月だった為)、5) 前回 (2009年度) の調査 (大味、2010) との部分比較による世代間の差異、等を調査目標に統一アンケートを実施した。

当大学のこの英語Ⅰ・Ⅱは同一コースでありながら、一般教養の英語教育と位置付けられている為もあって、共通のシラバスは特に存在せず、これまで各担当者がその専門分野や得意分野を中心に授業を行ってきた。それ故、アンケートの質問項目についてはそれぞれの授業内容を反映するものとし、且つ次年度のシラバスやカリキュラムに対しても参考になるよう、その内容については2名で協議の上で決定した。

ちなみに例年上位3クラスを筆者が、下位3クラスを別の講師が担当しているが、今回はプレイメントテストの区分よりも、授業内容の影響の方が重要である為、英語Ⅱの①②③の上位クラスを便宜上A群、英語Ⅱの④⑤⑥の下位クラスをB群と呼ぶことにする。尚、当大学の1年生に向けての英語必修授業では、上記の週1回の英語Ⅰ・Ⅱの他に、週2回の集中授業の形をとる「英語インテンシブ」というコースもあるが、今回は両者の担当外ということもあり調査対象としてはいない。

## 2. 調査対象

今回の調査対象は2010年度に両担当者が川越キャンパスで担当していた英語Ⅱの全6クラスで

あり、その詳細は下記の通りである。尚、当日は各クラスとも欠席者が数人ずついた為、当日の回答者は英語Ⅱ①②③の3クラス、A群（筆者担当）が計65名、英語Ⅱ④⑤⑥の残り3クラス、B群（別講師担当）が計50名の、6クラス合計115名であった。尚、各クラスとも本来履修者人数は25名前後である。

科目名	学年	学部学科	回答数	特記
英語Ⅱ①	1年生	総合政策学部共通	20名	再履修生3名含む
英語Ⅱ②	1年生	総合政策学部共通	17名	再履修生2名含む
英語Ⅱ③	1年生	総合政策学部共通	28名	再履修生9名含む
英語Ⅱ④	1年生	総合政策学部共通	14名	再履修生3名含む
英語Ⅱ⑤	1年生	総合政策学部共通	22名	再履修生6名含む
英語Ⅱ⑥	1年生	総合政策学部共通	14名	再履修生2名含む
			計115名	再履修生計25名

\*総合政策学部は総合政策学科とライフマネジメント学科の2学科を含む

ちなみにコース名称の後の○囲みの数字が、入学時のプレイスメントテストによる区分であり、数字の小さい方から成績の高い順となっている。前年度に単位を落とし、再履修となった学生は2年生から4年生まで6クラスで計25名を含むが、各クラス内容が学生にどの程度影響して来たかを調べる為もあり、今回は敢えてデータにそのまま含んでいる。

### 3. 調査方法

2010年度12月中旬に各クラスで授業内にアンケートを実施した（所要時間10分程度）。年度末に差し掛かっていた為、それぞれの授業内容が既に影響していると思われたが、その影響がどの程度出ているかも含め、今回は次年度予定のアンケート調査のパイロットスタディーにするべく実施した。尚、質問項目やその順序、回答方法については、文末の参考資料として末尾に付随しているアンケート用紙そのものを参照されたい。

尚、アンケート調査は共同で行ったものの、調査対象や専門分野が異なる為に、論文の執筆は大味、安井がそれぞれ別個に行うことにした。その為、この論文ではアンケート後半のデータが全て省略されているが、後日担当講師から別途報告されるものと御了解頂きたい。

### 4. 質問とデータ分析

アンケートの入力はそれぞれクラス担当が行い、具体的な意見やコメントなど、分類が必要な質問項目については筆者が全て一括して分類した。これはコメント等の回答内容にかなり曖昧なものも多く、その分類作業に当たっては基準を統一する必要がある為である（分類基準については後述を参照のこと）。

またアンケートの質問項目に学科やクラス名、さらに性別等も含まれていた為、学科毎、クラス毎、性別毎の分析も可能であったが、今回は調査対象でないので割愛した。その為、今回は参考までにクラス別のデータは示すものの、基本的には担当者別のA群B群クラスと全体を表記し、また指標選択の質問の場合は平均値並びに標準偏差を、項目選択の質問の場合はその合計値をA群B群別と、合計値とでデータ分析した。ちなみに指標数値はいずれも6段階評価（最小値1、最大値6、中間値3.5）である。

#### 4.1 英語全般について

まず英語全般に対する質問項目である。当アンケートでは問1「英語は好きですか」、問2「自分の今の英語力をどう思いますか。」にあたる。ここでは参考までにクラス毎のデータも示す。ちなみに調査が年末時だったせいか欠席数が多く、クラス毎の回答人数が最大で2倍も異なる為(例えば英語Ⅱ③は28名に対して、英語Ⅱ④と⑥は14名)、クラス間の数値分析によるデータ比較は行っていない。

表1-1 好き嫌い・自己評価力:クラス別

問1. 英語は好きですか。／問2. 自分の今の英語力をどう思いますか。									
	①	②	③	④	⑤	⑥	A群	B群	合計
問1. 平均	4.25	4.06	3.79	3.14	2.95	3.00	4.03	2.70	3.37
／標準偏差	1.26	1.70	1.24	1.06	0.93	1.20	1.39	1.07	1.35
問2. 平均	2.60	2.24	2.43	2.50	1.86	1.93	2.42	2.45	2.44
／標準偏差	1.07	0.88	0.98	0.82	0.87	0.88	0.97	0.91	0.96

\*丸数字は英語Ⅱのクラス名を表す(以下同様)。

問1は文字通りに英語の好き嫌いを問うており、問2では英語力に対する自己評価を問うている。問1ではA群クラスで4.03「やや好き」、B群クラスで2.70「やや嫌い」と大きく数値が異なっている。これに対して問2ではA群クラスが2.42、B群クラスが2.45と共に「やや苦手」とほとんど差が無い。ここで分かるのはプレースメントテストのクラス分けと関連があるのが、自分自身の英語力評価ではなく、寧ろ英語の好き嫌いであるということになる。

表1-2 好き嫌い・自己評価力:A群クラス年度比較

	2009年4月		2010年12月	
	平均	標準偏差	平均	標準偏差
問1.英語は好きですか。	2.83	1.17	4.03	1.39
問2.自分の今の英語力をどう思いますか。	2.00	0.89	2.42	0.97

A群クラスに限り、昨年行った調査(大味、2010)と比較すると、問1で数値が2.83から4.03へ、問2で2.00から2.42へと大きく異なっている。但しこの調査は年度初めの4月に行っている為、当教員の1年間の授業を経て、学生の意識が肯定的に変わった可能性も示唆している。調査母体が異なる為、現時点では推測の域を出ないが、同大学同専攻で同傾向がある学生と考えた場合、4月の時点で中間値(3.50)をやや下回る2.83と「英語はやや苦手」としていた状態から4.03と「やや好き」へと、また自己評価も「かなり低い」2.00から「やや低い」2.70へと好転していると言えるだろう。ちなみに、2009年4月での調査では回答人数は75人(アンケート実施を前期に行った為、科目名は英語Ⅰとなる)である。

#### 4.2 目指す英語力

次に問3で「大学で身に付けたい英語力は何ですか」として希望する英語力を聞いた。但し曖昧な回答を避け、また回答内容の分類を簡略化する目的で、こちらがこれまで観察して来た学生の傾向を考えて、予め選択肢として下記の通り12項目を挙げておいた。これは先述の通り、前年度の調査との比較を行う為にも大きな変更はしておらず、寧ろ前回回答の少なかったものに関しては統合し簡素化してある。ちなみに実際の選択肢では「その他」としてこれ以外の回答も記入

出来るようにしておいたのだが、回答はいずれも0件であったので、表2-1では省略してある。全体の結果は以下の通りである。

尚、ここからはデータをクラス別の回答数と全体の百分率で表すことにする。また各項目は質問用紙に並んだ順位ではなく、全体の回答数（パーセント）が多い順になっている。

表2-1 大学で身に付けたい英語力:クラス別

問3. 大学で身に付けたい英語力は何ですか。								
順位/選択項目	①	②	③	④	⑤	⑥	合計	%
1. スピーキング力	10	14	23	10	14	10	88	76.5
2. リスニング力	10	13	11	8	14	11	67	58.3
3. リーディング力	10	5	12	10	14	10	61	53.0
4. 日常・旅行の会話能力	12	12	15	5	5	9	58	50.4
5. ライティング力	4	5	6	6	12	7	40	31.3
6. 文法力	6	4	4	5	9	8	36	31.3
7. 仕事・ビジネスの会話能力	5	7	5	6	6	4	33	28.7
8. 語彙力	3	2	4	2	2	3	16	13.9
9. ネイティブのような発音力	7	1	4	0	0	1	13	11.3
10. 通訳・翻訳の英語力	3	1	2	2	3	1	12	10.4
11. プレゼン・スピーチ力	1	3	2	1	1	3	11	9.6
11. 各種英語試験での得点力	1	0	4	2	2	2	11	9.6

複数回答を可としてあった為に重複回答もあったが、学生の過半数から要望があったのは、4人に3人の回答があった筆頭の「スピーキング力（76.5%）」、続いて4人中2人の割合に相当する「リスニング力（58.3%）」、「リーディング力（53.0%）」、そして「日常・旅行の会話能力（50.4%）」であった。「読み」「書く」「聞く」「話す」の4技能のうち、「ライティング力（5位）」が抜け落ち、代わりに学校教育では学習項目として取り扱われていない「日常・旅行の会話能力」が4位に入っていることが特筆される。これは恐らく、日常英語で話す機会が少なからずある為、スピーキング力や日常・旅行の会話能力が必要と感じられる反面、4技能のうちライティング能力を問われることは比較的少ないからであると考えられる。

その後はずっと下がって約4人中1人の率となる「ライティング力（31.3%）」、同率で「文法力（31.3%）」、そして「仕事・ビジネスの会話能力（28.7%）」となる。学校教育で主に指導されているライティングや、文法力のニーズは少なくとも今回の学生の間では低いと言わざるを得ない。これは上記のようにライティング力を問われることが少ないことと、文法に魅力が無い、あるいは苦手意識が強いからなどがその理由として考えられる。

さらに少数派の回答では「語彙力（13.9%）」、「ネイティブのような発音力（11.3%）」、「通訳・翻訳の英語力（10.4%）」が入り、その他の「プレゼン・スピーチ力（9.6%）」、「各種英語試験での得点力（9.6%）」は共に10%を切った。ここでは特に多くの大学で英語力として学習項目に含んでいるプレゼンやスピーチ、あるいはTOEICや英検等の資格試験には学生の関心は決して高くないことが指摘出来る。

尚、この選択肢では4技能のうち「話す能力」に「スピーキング力」という一般的な訳語を当てはめているが、それは学校教育に於いて「スピーキング」と言うと何か教科書の例文を丸暗記するような硬いイメージが付きまとい、所謂語学学校等で行われているような「英会話力」と結びつきにくい為であり、さらに「ビジネス英会話」などという表現がまたさらに別の分野を連想させがちであるからである。実際に「日常・旅行の会話能力」や「仕事・ビジネスの会話能力」とそれぞれ別個に選択項目として挙げてあるが、学生は各々異なるものとして回答してあるので、選択肢としては妥当であったと思う。

表2-2 大学で身に付けたい英語力: A群B群別

問3. 大学で身に付けたい英語力は何ですか。					
順位 ／分類項目	A群		順位 ／分類項目	B群	
	n	%		n	%
1. スピーキング力	54	83.1	1. スピーキング力	34	68.0
2. 日常・旅行の会話能力	39	60.0	1. リーディング力	34	68.0
3. リスニング力	34	52.3	3. リスニング力	33	66.0
4. リーディング力	27	41.5	4. ライティング力	19	50.0
5. 仕事・ビジネスの会話能力	17	26.2	5. 文法力	25	44.0
6. ライティング力	15	23.1	6. 日常・旅行の会話能力	22	38.0
7. 文法力	14	21.5	7. 仕事・ビジネスの会話能力	16	32.0
8. ネイティブのような発音力	12	18.5	8. 語彙力	7	14.0
9. 語彙力	9	13.8	9. 通訳・翻訳の英語力	6	12.0
10. 通訳・翻訳の英語力	6	9.2	9. 各種英語試験での得点力	6	12.0
10. プレゼン・スピーチ力	6	9.2	11. プレゼン・スピーチ力	5	10.0
12. 各種英語試験での得点力	5	7.7	12. ネイティブのような発音力	1	2.0

次にA群クラスとB群クラスを比較すると、それまで受講していた各授業内容がかなり色濃く反映していることが窺える。A群クラスは主にペアワークを中心に、会話によるコミュニケーションを重視しており、読解、語彙などを宿題としてのみ課している。従って上記の選択項目としては、スピーキング能力、日常・旅行の会話能力、リスニング力等が、関連している。果たして「スピーキング力」は1位（83.1%）、並んで「日常・旅行の会話能力」は2位（60.0%）、さらに「リスニング力」が3位（52.3%）と続いており、学生の関心が授業の主眼である口頭のコミュニケーションに移っていることが窺われる。これは後述の年度間の比較でも明らかになっている。

一方でB群クラスは辞書の使い方を中心に、基礎力を充実するべく自力学習が出来るよう指導しながら、スピーキングを除いた3技能を中心に授業を展開しており、語彙などを宿題として課している。従ってリーディング力、リスニング力、ライティング力、文法力などが関連分野として挙げられる。実際に学生の回答では、大凡予想通りで、2位「リーディング力（68.0%）」、3位「リスニング力（66.0%）」、4位「ライティング力（50.0%）」、5位「文法力（44.0%）」と続いている。ここで意外だったのは、B群クラスではスピーキングの指導は行っていないにもかかわらず、スピーキング力の要望が高く同率1位（68.0%）であったことである。これは大学での授業内容に関わらず、学生の間には「スピーキング」の需要が高い可能性を示している。

表2-3 大学で身に付けたい英語力: A群クラス年度比較

問3. 大学で身に付けたい英語力は何ですか。					
順位 ／選択項目	2009.4.		順位 ／選択項目	2010.12	
	n	%		n	%
1. リーディング力	47	62.7	1. スピーキング力	54	83.1
2. リスニング力	41	54.7	2. 日常・旅行の会話能力	39	60.0
3. 文法力	37	49.3	3. リスニング力	34	52.3
4. 日常・旅行の会話能力	36	48.0	4. リーディング力	27	41.5
5. スピーキング力	24	32.0	5. 仕事・ビジネスの会話能力	17	26.2
6. 語彙力	13	17.3	6. ライティング力	15	23.1
7. ネイティブのような発音力	9	12.0	7. 文法力	14	21.5
7. 各種英語試験での得点力	9	12.0	8. ネイティブのような発音力	12	18.5
9. ライティング力	8	10.7	9. 語彙力	9	13.8
9. 通訳・翻訳の英語力	8	10.7	10. 通訳・翻訳の英語力	6	9.2
11. 仕事・ビジネスの会話能力	5	6.6	10. プレゼン・スピーチ力	6	9.2
12. プレゼン・スピーチ力	2	2.67	12. 各種英語試験での得点力	5	7.7

次にA群クラスに限って年度間の比較で授業内容の影響を考慮してみると、同じような傾向が見て取れる。当初ライティング力への関心はかなり弱く、文法力の要望が強いが、1位が「リーディング力（62.7%）」、2位が「リスニング力（54.7%）」と、4技能プラス「日常・旅行の会話能力」へのニーズが高い。これが会話中心の授業を受講し年度終わりに近づくと、「スピーキング力」と「日常・旅行の会話能力」が1位（83.1%）、2位（60.0%）を占めるようになり、同時に関心が高まったのか、当初11位（6.6%）とニーズが低かった「仕事・ビジネスの会話能力」が一気に5位（26.2%）と上位にきている。当然のことながら、相対的にリーディング力や文法に対する関心がそれぞれ4位（41.5%）、7位（21.5%）と低くなっている。ここから推測されるのは、授業の内容によっては学習者の興味関心が低いものも高く出来、また逆に高いものも低くなる可能性があるということである。

#### 4.3 英語の必要性について

問4-1.「自分の人生に英語はどのくらい必要だと思いますか。」と問4-2.「それはどうしてですか。」は自分の人生で英語がどれだけ拘って来るかについての質問である。これは英語の授業から離れて、将来的に自分がどの程度英語に触れるのか、またどうしてそう思うかを具体的に尋ねたものである。

表3-1 英語の将来的な必要性（数値）：クラス別

問4-1. 自分の人生に英語はどのくらい必要だと思いますか。									
	①	②	③	④	⑤	⑥	A群	B群	合計
平均	4.80	4.65	4.07	4.36	3.91	4.50	4.51	3.42	3.69
標準偏差	1.17	0.97	1.13	0.72	1.08	1.45	1.15	1.17	1.17

データを見る限り、学生の英語力と将来の必要度の関連は低い。上位クラスと下位クラスそれぞれの平均を見ると差が出ているが、クラス別の数値を見ると、この違いは寧ろ特定クラスの数

値の影響が大きいと見て取れる。特にクラス③、クラス⑤、並びにクラス⑥の数値が大きく異なっており、その影響が大きい。その理由については以下の分類項目のデータからある程度推測されるので、下記を参照されたい。

表3-2 英語の将来的な必要性（分類）：クラス別

問4-2. それはどうしてですか。								
順位／分類項目	①	②	③	④	⑤	⑥	合計	%
1. 将来的に必要なだから（漠然的）	4	3	6	4	5	0	22	19.1
2. 海外に行く・行きたいから	3	1	8	3	2	3	20	17.4
3. 仕事で必要だから（具体的）	4	3	3	4	3	3	20	17.4
4. 世界共通語だから	2	2	1	1	4	2	12	10.4
5. 必要ないから	1	1	1	0	5	2	10	8.7
6. 外国人と話すことがあるから	1	3	3	2	0	1	10	8.7
7. 日本の社会常識だから	3	1	0	0	1	3	8	7.0
8. 国際社会・時代だから	1	1	1	0	1	1	5	4.3
9. 海外に行かないから	1	0	2	0	1	0	4	3.5
10. 好きだから・格好いいから	1	0	1	0	0	0	2	1.7
11. 嫌いだから	0	0	0	0	1	0	1	0.9
12. 無回答	1	1	3	1	1	1	8	7.0

この質問では選択項目を挙げずに、オープンクエスチョンとした。回答内容があまり予想出来なかったのが主な理由だが、その為か全体的に曖昧な回答が多く見られた。さてその分類基準であるが、まず具体的に「仕事で」や「就職して」などと記述してあるか、「多分将来」や「いつか」等と曖昧な表現を使っているかで、「仕事で必要だから（具体的）」（3位）と「将来的に必要なだから（漠然的）」（1位）に大きく2つに区分した。また「海外」や「外国」等、日本国外と明記してあるか、あるいはまた「外人」「外国人」「アメリカ人」などのように、具体的に英語話者の「人」を明記してあるか否かでも、回答を「海外に行く・行きたいから」（2位）と「外国人と話すことがあるから」（6位）に分けてある。さらには日本国内の事情によるものか、日本を超えて世界的見地から見たものか、将又国際共通語として考えたのかで、残りの回答を「日本の社会常識だから」（7位）と「国際社会・時代だから」（8位）、「世界共通語だから」（4位）に分類した。

全体的に回答内容がこれ以上絞り込めなかった為、詳細な分析は困難であった。これは2009年度の調査でも同様の問題が発生した為、次回の調査では回答方法をさらに工夫しなければならないと考えている。

表3-3 英語の将来的な必要性（分類）：A群B群別

問4-2. それはどうしてですか。					
順位 ／選択項目	A群		順位 ／選択項目	B群	
	n	%		n	%
1. 将来必要だから（漠然的）	13	20.0	1. 仕事で必要だから（具体的）	10	20.0
2. 海外に行く・行きたいから	12	18.5	2. 将来必要だから（漠然的）	9	18.0
3. 仕事で必要だから（具体的）	10	15.4	3. 海外に行く・行きたいから	8	16.0
4. 外国人と話すから	7	10.8	4. 世界共通語だから	7	14.0
5. 世界共通語だから	5	7.7	5. 必要ないから	7	14.0
6. 日本の社会常識だから	4	6.2	6. 日本の社会常識だから	4	8.0
7. 必要ないから	3	4.6	7. 外国人と話すから	3	6.0
7. 国際社会・時代だから	3	4.6	8. 国際社会・時代だから	2	4.0
7. 海外に行かないから	3	4.6	9. 海外に行かないから	1	2.0
10. 好きだから・格好いいから	2	3.1	10. 嫌いだから	1	2.0
11. 嫌いだから	0	0.0	11. 好きだから・格好いいから	0	0.0
12. 無回答	5	7.7	12. 無回答	3	6.0

概してここでも曖昧な回答内容が多く、逆に言えば学生の間で将来どのような場面で英語力が必要になるか、またどの程度必要になるかについて、ほとんどイメージできていない事実が見て取れる。英語の将来のニーズが見えていないから英語学習に影響が出ているのか、また英語力によって将来の英語ニーズが変わってくるのかは、この調査からは不明であった。尚、年度比較は前年度のデータの解析が出来なかった為、この項目では行っていない。

#### 4.4 英語が出来たらしてみたいこと

上述のように先の間4では明確な回答を期待できなかったので、問5。「もし英語を使えたら何をしたいですか。」で角度を変えて将来の希望を聞いた。現在の英語力とは関係なく、もし英語を流暢に使えるようになったら、自身の人生の選択の幅が変わるのか、学生にイメージさせる質問である。こちらも自由な回答を即したかったので、オープントクエションとした。以下その分類結果である。

表4-1 英語が出来たら（分類）：クラス別

問5. もし英語を使えたら何をしたいですか。								
順位／分類項目	①	②	③	④	⑤	⑥	合計	%
1. 外人と話す。	7	8	11	7	9	5	47	40.9
2. 海外旅行をする。	8	8	9	5	8	6	44	38.3
3. 外国に住む。	0	0	4	2	2	1	9	7.8
4. 出来ることは何でも。	2	0	1	0	3	2	8	7.0
5. 英語で仕事をする。	2	1	3	0	1	0	7	6.1
6. 通訳・翻訳をする。	2	0	0	1	2	1	6	5.2
7. 英語の仕事をする。	0	0	2	0	0	0	2	1.7
8. 無回答	0	0	2	0	0	0	2	1.7

表4-1の通り、結果は意外と単純なものであった。1位が「外人と話す」(40.9%)、2位が「海外旅行をする」(38.3%)で、他はいずれも10%に満たない回答であった。英語が出来ないコンプレックスがある為に、外国人と話も出来ず、海外旅行にも躊躇している様子が見て取れる。逆に言えば、英語に自信が付けば積極的に行動するかもしれない可能性を示唆している。

実際、英語の将来的な必要性を問うた、先の間4-2.「それはどうしてですか。」では表3-2の通り、5位「必要ないから」(8.7%)や9位「海外に行かないから」(3.5%)の消極的な回答や、一見必要が無いとも見て取れる程の回答、6位「外国人と話すから」(8.7%)も、裏返せば、英語が使える様になれば、その将来的な必要性そのものが変わってくると解釈が可能だろう。

表4-2 英語が出来たら（分類）：A群B群別

問5. もし英語を使えたら何をしたいですか。					
順位 ／分類項目	A群		順位 ／分類項目	B群	
	n	%		n	%
1. 外人と話す。	26	40.0	1. 外人と話す。	21	42.0
2. 海外旅行をする。	24	38.5	2. 海外旅行をする。	19	38.0
3. 外国に住む。	4	6.2	3. 外国に住む。	5	10.0
4. 英語で仕事をする。	6	9.2	4. 出来ることは何でも。	5	10.0
5. 出来ることは何でも。	3	4.6	5. 通訳・翻訳をする。	4	8.0
6. 通訳・翻訳をする。	2	3.1	6. 英語で仕事をする。	1	2.0
7. 英語の仕事をする。	2	3.1	7. 英語の仕事をする。	0	0.0
8. 無回答	2	3.1	8. 無回答	0	0.0

A群B群別のデータも特に大きな差は見られなかった。逆に言えば、現在の英語力に関わらず、これらの結果はこの世代が共通に持つ傾向と言える。

#### 4.5 将来的英語ニーズ状況

最後に問6で「卒業後、どんな場面で英語を使うと思いますか。具体的に書いて下さい。」と尋ね、オープンクエスチョンとした。先の間4-1「自分の人生に英語はどの位必要だと思いますか。」や問4-2「それはどうしてですか。」では、学生の英語ニーズについてもっと大雑把に問うていたため、こちらではより「具体的な」回答を期待していた。以下、その結果である。

表5-1 将来的英語ニーズ状況（分類）：クラス別

問5. 卒業後、どんな場面で英語を使うと思いますか。具体的に書いて下さい。								
順位/分類項目	①	②	③	④	⑤	⑥	合計	%
1. 国内の仕事・勉強で。	9	8	7	9	13	6	52	45.2
2. 国内で外人との接触で。	5	6	16	3	5	6	40	34.8
3. 海外旅行で。	4	8	8	4	6	6	36	31.3
4. 海外の仕事・留学で。	5	0	2	1	1	0	9	7.8
5. 国内の仕事・勉強以外で。	2	0	1	0	0	0	3	2.6
6. 使わない。	0	0	0	1	1	0	2	1.7
7. 分からない。	0	1	0	0	0	0	1	0.9
8. 無回答。	2	1	3	0	1	1	8	7.0

まずは分類の基準であるが、基本的には回答内容が「国内」をイメージしているのか、または「海外」をイメージしているかで大別し、そして次に具体的な人である「外人」もしくは「外国人」等の記述の有無により区分した。これはメールや契約書等、文字情報のみを介して英語を使うのか、あるいは目の前、または電話の先に相手がいる状況で英語を使用するのかを区別する為である（無論、海外の場合は目の前の外人を想定していると考えた為、全て対人接触と想定した）。最後の分類基準は、仕事や勉強で使うのか、それとも旅行や趣味で使うのかで分けた。これは差し迫った状況で自分の好むと好まざるとに関わらず英語を使うのか、それともあくまで自分の意志で使うのかを区別したかったからである。ちなみに6.「使わない」、7.「分からない」、8.「無回答。」は回答も少数で内容もほぼ同様であるが、上記の質問との関連もあったので、敢えて別項目として扱った。

結果は先の間4-1「自分の人生に英語はどの位必要だと思いますか。」、問4-2「それはどうしてですか。」と類似したものであったが、こちらでは明らかに国内での英語ニーズを想定しているのが見て取れる。1位が「国内の仕事・勉強で。」(45.2%)となっており、今後就職してから必要になってくるだろうと考えているのが窺える。また2位に「国内の外人との接触で。」(34.8%)とあるが、こちらは道を聞かれる等の、不意の接触が主に考えられており、日本国内の外国人人口の増加がその背景にあるのかもしれない。3位、4位はいずれも海外での英語使用と答えており、それが旅行なのか、出張や留学なのかによるものなのかの差でしかない。但し、3位の「海外旅行で。」(31.3%)に比べ、4位の「海外の仕事・留学で。」とした回答は僅か7.8%に過ぎず、現時点では就職での海外出張や留学等はあまり頭に無いようである。

表5-2 将来的英語ニーズ状況（分類）：A群B群別

問5. 卒業後、どんな場面で英語を使うと思いますか。具体的に書いて下さい。					
順位 /分類項目	A群		順位 /分類項目	B群	
	n	%		n	%
1. 国内で外人との接触で。	27	41.5	1. 国内の仕事・勉強で。	28	45.2
2. 国内の仕事・勉強で。	24	36.9	2. 国内で外人との接触で。	14	35.7
3. 海外旅行で。	20	30.8	3. 海外旅行で。	16	31.3
4. 海外の仕事・留学で。	7	10.8	4. 海外の仕事・留学で。	2	7.8
5. 国内の仕事・勉強以外で。	3	4.6	5. 国内の仕事・勉強以外で。	0	2.6
6. 分からない。	1	1.5	6. 使わない。	2	1.7
7. 使わない。	0	0.0	7. 分からない。	0	0.9
8. 無回答。	6	9.2	8. 無回答。	2	7.0

A群B群分類の結果でもあまり大きな差異は無く、強いて挙げるならA群グループでは「使わない。」とした回答が0で、その代わり1位が「国内で外人との接触で。」となっていてどちらかと言えば積極的に関わろうとしているらしい反面、B群グループではそれが2位になっており、「国内の仕事・勉強で。」とした回答が1位になっているので、止むに止まれず英語を使う状況になるだろうと考えているらしいことくらいであろう。

表5-3 将来的英語ニーズ状況（分類）A群クラス年度比較

問5. 卒業後、どんな場面で英語を使うと思いますか。具体的に書いて下さい。					
順位 ／選択項目	2009.4.		順位 ／選択項目	2010.12	
	n	%		n	%
1. 海外旅行で。	31	47.7	1. 国内で外人との接触で。	27	41.5
2. 国内で外人との接触で。	23	35.0	2. 国内の仕事・勉強で。	24	36.9
3. 国内の仕事・勉強で。	18	26.0	3. 海外旅行で。	20	30.8
4. 国内の仕事・勉強以外で。	6	9.2	4. 海外の仕事・留学で。	7	10.8
5. 海外の仕事・留学で。	5	7.7	5. 国内の仕事・勉強以外で。	3	4.6
6. 分からない。	1	1.5	6. 分からない。	1	1.5
7. 使わない。	0	0.0	7. 使わない。	0	0.0
8. 無回答。	14	22.0	8. 無回答。	6	9.2

年度比較で大きく異なるのは、2009年度に「海外旅行で。」が1位になっていたのが2010年度に3位になっており、これに対して2位の「国内で外人との接触で。」(35.0%)と3位の「国内の仕事・勉強で。」(26.0%)が、それぞれ1位(41.5%)、2位(36.9%)になっている。可能な解釈としては、海外旅行と言った漠然とした英語ニーズが、授業での会話練習を通してやや具体性を帯びてきた結果、自ら積極的に接触しようとして変化して来たのではないかと思われることである。この点についての詳細な検証は今回のデータでは明らかに出来ないため、次回の調査に委ねたい。

## 5. 結論

英語Ⅰ・Ⅱという同一コース全体に、初めて統一アンケートを実施し、今回はその半分のデータの解析を試みた。調査全体の結論は残りのデータの解析を待たなければならないが、ここでは今回報告したもののみから考えてみたいと思う。

まず今回調査対象とした学生については、英語の自己評価が全般的に低いながらも、外国人との直接の接触をかなり意識していること、また話す英語力のニーズがかなり高いことが分かった。また英語が使えたらという仮定の問いに対しても、外人との直接のコミュニケーションを取りたいという希望が多かったことが、学生の現在の傾向を表しているように思われる。これは同時に、現在の文法・読解中心の大学の授業では、学生の要望に合致していないことも意味する。そして多くの大学で英語の授業として行われている英語によるプレゼンテーションやスピーチ、さらにはTOEICに代表される各種英語試験も、学生が追い求めている英語力ではないことも明らかになった。

次に授業内容が学生の英語に対する意識に相当程度影響を与えているらしいことが分かった。すなわち英語力だけでなく、英語学習への取り組みそのものや英語を使うことに対する態度が、授業活動によって変化している可能性が高いということである。これは見方を変えれば、単位数を重ねる為だけに通常履修している必修授業ですら、英語嫌いの学生の修学態度に変化を与えられることを示唆している。また異なる年度でも学生に同様の傾向があるなら、との限定付きではあるが、4月から12月の短期間(実質7か月間)でも、英語に対する学生の態度に変化を起し

た可能性もあった。

まとめとしては、今回対象とした学生には、英語に対するコンプレックスが強い反面、英語に対するニーズは大多数の学生は曖昧ながらも認識しており、そして十分な英語力があれば積極的に外国人と英語でのコミュニケーションを取ってみたいという希望があることが分かったのである。

## 6 終わりに

設問の不備や選択肢の絞り込み等で、アンケート用紙の設定そのものにまだまだ改善の余地があったが、次年度（2011年度）の調査のパイロットスタディーとしては貴重なデータが得られたと考える。また単年度の短期間であっても、学生の英語学習の態度や英語そのものに対する意識変化の可能性が示唆された為、今回は4月の初回授業、並びに1月の最終授業の2回に分けて同じ質問項目で、学生の意識の変遷をさらに包括的に追ってみたいと考える。今回のデータ分では、ゆとり学生についての特徴はほとんど捉えられていないので、取り敢えず現時点では残りのデータ解析を待ちたい。

### 参考文献

大味 潤、「総合政策学部総合政策研究紀要第16・17号」p.95-p.108 尚美学園大学総合政策学部、2009。

大味 潤、「総合政策学部総合政策研究紀要第19号」p.67-p.80 尚美学園大学総合政策学部、2010。  
パウロ・フレイレ、「被抑圧者の教育学」、A.A.LA.教育・文化叢書、小沢 有作（翻訳）、1979。



